

獣害対策講座 Vol.24

※タイトルに記載している『雅ねえ』の表記は、本人の原稿どおりで掲載の了承を得ています。

大崎町のみなさん、こんにちは。本紙広報おおさきの表紙にSDGs推進宣言のまじって文字がある。ゴミ分別収集の実績がある大崎町の宣言だからこそ町の本気度が伝わってくる。

頼もしいなあ。あたしも自分でできること頑張らなくちゃ。

前回

前回、前々回と獣たちを寄せ付ける不要樹の伐採の話。たった一本の不要樹が庭先の日照争奪戦を始め、庭木たちも一斉に高く茂り動物を寄せ集落を作り出す。しかもカキ、ビワ、クリなど餌になる果樹も採れない高さに伸びびやう。だから不要樹は切つてねという思いで2回にわたって書いた。

今回

今回は最終回。獣害対策の立場から『持続可能な集落の未来』のこと考えてみるね。なぜなら大崎町は小さな町だけれど、日本の、そして世界のモデルになりそうな町と思うから。

楽しく守れる田畑と集落

庭の不要木伐採したり、果樹の樹高を下げたり。これって後は気づいたときにちよこちよこツと手をいれるだけで維持できる田畑や集落環境づくり。果樹だって脚立なしで剪定から収穫まで全部やれちゃう。

結果的に何歳になっても行くのが楽しい畑や庭になり、健康寿命を延長しながら獣を寄せ付けにくい集落へと変わっていく。

爺ちゃん婆ちゃんが楽しんで故郷の田畑を荒らさないで守っていれば、「定年後は都会に住むより故郷に帰って田畑も庭の手入れも手伝うよー」って人も増えるでしょ。

これは持続可能な農業、農地の維持につながるし、そう考えればコロナも災い転じて福的な定住の追い風と言えなくもない。

定年で都会から帰ってくれた息子夫婦がおうちで食事。ささやかだけれど、故郷でとれたおコマや野菜が故郷で消費される。

地産地消は二酸化炭素まき散らして都会へ走るトラック

を減らす環境への貢献でしょ。大崎町の青々と広がる採草地、そして、いただいたおいしい牛乳の味思い出しながら考えた。

私の大好きないろいろな種類のチーズも大半は大切なオゾン層を切り裂いてジェットカーゴで運ばれてくるヨーロッパからの輸入品。

いつかこの牧草で育った大崎の牛たちのチーズが食べられる日がくればいいなあって。

生物多様性の維持

獣害対策とは野生動物に「ここは食えないし住めないところだから来るな」というメッセージを伝えること。なぜこだわるかというと実はもうひとつ大切なメッセージが込められているから。

それはメッセージの発信がないところで動物なりにしっかり命つないでねという思い。「人権を認めてくれたら獣権も認めるからね」っていうメッセージは生物多様性の維持にかなうんじゃないかな。

だって、ネズミもタヌキもイノシシも何億年と進化しながら絶滅せずに地球上で生きてきたんだから。

イノシシが教える 女性差別解消

多くの県で集落単位の獣害対策に取り組む中でイノシシはとても大切なこと教えてくれた。

それは女性が多数講習会に参加してくれる集落が圧倒的に取り組みが早い。

そして何度も紹介してきたように獣害対策きっかけに地域活性化しちゃう所もどんど

